

る。上の湿原に早く出るには左に入った方がよさそうだ。右に入る。しばらく歩いた後左にヤブをこぐと又沢に出て、これをつめると馬場谷地であった。

(記・生 匠)

(タイム)

金山沢橋九：〇〇—二俣九：一五—馬場谷地一二：二〇

## 金山沢左俣

(下降)

一九八〇年七月二十日

◆天気(晴時々曇)

馬場谷地湿原で昼食をとり登山道を一〇分程歩いてから下降を開始する。

一〇分程下ると沢に水が出て来た。すぐにF12三〇が斜瀑(水量が少ない)。沢の兩岸は岩場、この沢全体は長いトイ状になっているようで兩岸が岩質で川床が滑りやすかった感じである。

三俣の滝が連続して現われる。足をすべらせないように慎重に下りる。次のF9三俣ではちよつと下りるのがむずかしいのでザイルを出してアップザイレンにして下



金山沢左俣の下降

りる。下は滑が五〇分位続いていた。すぐに滝が連続しているがみなトイ状もしくは滑滝である。また倒木で半分沢も滝もうまっている所があり階段を下りるような感じだ。

しばらく小滝がまばらに現われる。そしてこの沢最大の四十分の滝。しかし直瀑は中間の五分で上と下はゆるい滑です。又、この滝は倒木が無い唯一の滝でもあった。他の滝は多かれ少なかれ倒木や土砂、枯葉等に埋る事が多い。

この下には小滝や滑滝だけで二俣まで何なく下りられた。水量は左の方がいく分多いようです。これより五分位

で(途中F13<sup>1</sup>がある)今朝登っていった右俣(どちらかといえは本流)との合流点に着く。一五分程で橋(金山沢橋)まで下り林道を歩いて車を置いてある所まで行き吾妻川を遡行したパーティと落ち合った。

(記: )

(タイム)

下降開始一二・五〇—二俣一四・四〇—金山沢橋一四・五五

## 戸倉川右俣右沢

一九七九年七月二十二日

◆天気(晴)

未知の沢を登るときには胸がわくわくしてくる。たとえ地図をみて、たぶん大きな滝はないだろうと予測ができて、突然に二〇<sup>1</sup>も三〇<sup>1</sup>もの大きな滝が現われることを期待して一步一步遡行していく。

この戸倉沢は白布峠に源をおこす標高差約五〇〇<sup>1</sup>メートル程の中規模の沢である。数ヶ所にナメコ栽培地があつて沢沿いにだいたい奥まで道が入っており、丸太橋がかかつて

いた。ちよつとしたゴルジュがあつたが、滝は我々の期待に反して強いてとりあげる程のものはなかった。このように奥まで道のついた沢は沢登りとしての興味には全く欠ける。

(記: )

(タイム) 出合六・二五—二俣六・四五—終了八・五〇

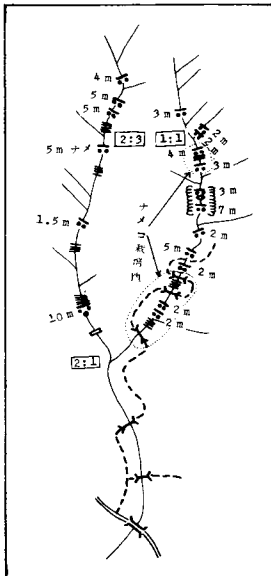
## 戸倉川右俣左沢

一九七九年七月二十二日

(下降)

◆天気(晴)

九時一〇分下降開始。最初五<sup>1</sup>程の小滝が三つ出てきて、これならと期待させたがその先は平凡。おまけにブ



戸倉川右俣  
(作図: )

金山沢 (作図)

